

●東日本大震災

あの東日本大震災から五か月。今、ぼくは仮設住宅に家族といっしょに暮らしています。

ぼくは、あの日、中浜小学校で社会の授業の最中でした。

とつぜん、今まで体験したことのない地震が起こりました。たなやテレビもたおれそうなくらい動いている中、先生の指示に従って机の下に入りました。

地震がおさまってから先生がテレビをつけると、宮城県、岩手県、福島県の沿岸部に初めて聞く大津波警報が発令されていました。

ぼくたちは、すぐに屋上に上がりました。空は、さっきまで晴れていたのに急に曇り、雨が降ってきて、まるで空が泣いているようでした。

津波が来る前はみんな笑っていましたが、第二波が来たしゅん間、表情が変わりました。みんなは、屋上にある倉庫に入りました。下の学年の中には、泣いている子もいました。入ってすぐに校長先生が、「ぶつかるぞう。」

と言うと、同時に、すごい音を立てて津波が校舎にぶつかりました。

しばらくして倉庫から出て外を見たら、学校の周りはすっかり変わってしまっていました。緑豊かな中浜の美しさは跡形もなくなり、今起きていることが本当だとは思いたくないぐらいでした。

その日は、学校の屋上で一晩過ごすことになりました。もうすぐ春だとは思えないくらい寒い夜でした。空には、今まで見たことのないような数の星がかがやいていて、津波なんかなかったかのようでした。

次の日の朝6時ごろ、自衛隊のヘリコプターがすごいスピードで飛んでいるのが見えました。手をふると、その中の一機がぼくたちのことを見つけて、水の引いた校庭に下りてきてくれました。ぼくたちは、そのヘリコプターで別の場所にひなんすることができました。校庭に出たときも何回か波が来ているのが見えました。

ひなん先の体育文化センターに向か

う途中、ヘリコプターから下を見ると、あたりには家はなく、水につかったがれきがあるだけでした。

体育文化センターにはお父さんが来ていて会ったときには泣いてしまいました。お父さんの車でテレビを見たとき、初めてこの震災の現状を目の当たりにしました。

その二日後から、坂元中学校でのひなん生活が始まりました。

初めは水も電気もない不便な生活で、とてもつかれました。でも、ほかの県からの救援物資のおかげで、元の生活に近い生活ができるようになりました。今は、仮設住宅で家族といっしょに楽しく暮らしています。近くにはたくさんの友達もいます。まだ落ち着かないところもいろいろあって不安ですが、みんなで助け合いながらがんばっていきたいです。

(作文宮城60号 特別編「あの日の子どもたち」より)

